



Blue
Planet
Prize
2025

2025年(第34回)ブループラネット賞
受賞者 取材抄録

ジェレミー・レゲット博士

公益財団法人 旭硝子財団
THE ASAHI GLASS FOUNDATION

ジェレミー・レゲット博士 (英国)

Dr. Jeremy Leggett



地球科学者、環境経済学者

社会起業家、文筆家

1954 年 3 月 16 日 英国生まれ

ハイランド・リワイルディング社創設者・CEO

カーボン・トラッカー・イニシアティブ初代会長

<子供時代>

レゲット博士は 1954 年 3 月、イギリス南部にあるヘースティングスの郊外で生まれ育ちました。両親と 2 歳年下の妹との 4 人家族で、父親は中学校の教師、母親は中学校に勤務していました。両親ともにアウトドア派で自然が大好き。休暇のたびに子供たちを連れてスコットランドに旅行し、ユースホステルに泊まり、キャンプをし、山登りなどをして楽しんだそうです。その影響で、少年時代のレゲット博士は大好きな釣りの他、いろいろなスポーツに積極的に参加するなど、活発な少年だったそうです。中でも一番の興味は化石や岩石の熱心なコレクターで、博士が科学への興味を抱いたきっかけとなりました。化石への愛情は、のちに大学と大学院で地質学を学ぶことにつながり、地球史への深い関心が、その後の気候変動に関わる仕事へとつながって行くのです。



写真 1 幼い頃からサッカーを愛していたレゲットさん

<大学時代>

博士は 16 歳で中学を卒業後、地元の教育カレッジに進み、植物学と動物学、地理学を学びます。勉強があまり得意ではなかった少年時代とは異なり、植物学と動物学において優秀な成績をおさめたことで、ウェールズ大学に進学します。その後、オックスフォード大学の大学院に出願し、博士号にチャレンジしました。博士は、まさか受かるとは思っていなかったそうですが、見事に合格し、オックスフォード大学で古代の

海洋についての研究を始めます。スコットランドの南部に、かつて古代北アメリカと古代ヨーロッパの間にあった古代海洋の堆積物があり、その岩石を調べる研究です。その時に大きな影響を受けた恩師がいました。研究の指導教員だったスチュアート・マッケロー博士です。情熱的な地質学者で、熱心に研究者たちの面倒をみてくれた恩人でした。レゲット博士は、あるフィールドワークに行った時にマッケロー博士から言われた言葉を今でも覚えているそうです。“レゲット、君は私がこれまでみてきた学生の中で最も優秀な学生とはとても言えないが、本当にずば抜けてきちんとしている”と言われたそうです。当時優秀な研究生はたくさん居たので、優秀だと言われるよりも、“きちんとしている”と言われたことを誉め言葉と受け止め、とても嬉しい気持ちになったと当時を振り返っています。マッケロー博士の元、大学院で3年間の研究期間を経て地球科学の博士号を取得します。

自分は学業に関しては遅咲きだと言うレゲット博士、オックスフォード大学大学院時代は中毒ともいえるほどに研究に打ち込み、地球史というテーマに魅了されていました。卒業も近くなった24歳の頃のある日、とある求人広告を見かけます。インペリアル・カレッジの王立鉱山学校での講師の求人でした。マッケロー博士からは、合格は難しいだろうと言われたそうですが、それでも応募してみたところ、その職を手にすることができたのです。大学卒業後もアカデミックな世界に残り地球史の研究を続けたいと思っていたレゲット博士にとって、それは大きな幸運でした。

＜大学院卒業後の仕事＞

王立鉱山学校では地質学のひとつの分野である“層序学”という地球史に関わる学問の講師をしました。地層が造られた時代ごとの岩質や含まれる化石を調査し、地球の歴史を研究する学問です。当時レゲット博士は、学校での講師をしながらシェール層の研究もおこなっていました。シェール層内に閉じ込められている石油に関する研究で、その研究は石油メジャーと呼ばれる世界的な大手石油会社であるBPとロイヤル・ダッチ・シェルの2つの会社から資金提供を受けていました。レゲット博士は、自分は1980年代の後半まで、明らかに石油業界側の人間だったと述懐しています。博士は良心の呵責に苛まれます。学校の講師として学生たちには石油や石炭などが様々な問題の原因となっていることを教えながら、一方で石油会社に役立つ研究をおこなっていたからです。この葛藤に苦しんだ博士は、ある日、意を決して、シェール層の研究を含め学校の講師も辞めることにしました。1989年、博士が35歳の時でした。

＜グリーンピースからオックスフォード大学へ＞

講師の仕事を辞めたあと、博士はグリーンピースで働くことになります。気候変動に関する運動を起こそうとしている学者として、グリーンピースの目に留まり雇われた

のです。最も保守的な大学から最も急進的な環境団体への異色の転身でした。最初の1年は、野生動物や有害物質、原子力や気候などの全てのキャンペーンに関与する科学者として仕事をしていたそうですが、気候変動に対して携わりたいという希望を訴え、気候変動に関する科学者の責任者として、グリーンピースの各国のオフィスと連動しながら気候に関する活動に取り組みました。この時博士は、グリーンピース内の極めて優秀なリーダーやマネージャーの人たちとの仕事を通して、のちに起業家になるための大切なスキルを学んだそうです。自分のキャリアの上で、グリーンピースでの経験はとても幸運だったと博士は言っています。グリーンピースで、主にロビイストとしてビジネス関係者と交流が多かった博士は、多くのビジネスマンから、会社を設立してビジネスの世界で行動するべきだと言われます。そこで博士は、グリーンピースからサバティカルをもらい、一旦、オックスフォード大学で働くことにします。大学では気候変動と保険業界の関係を研究し本を執筆。保険業界に対して、気候変動のリスクの低減に積極的に取り組み、気候変動の緩和策や温暖化の逆転を促進するためのロビー活動を働きかけるなど、既得権益に固執する石油やガス業界に対抗するための活動を続けました。



写真 2 シベリアの油田を訪れたグリーンピースのミッションにて。イヌイットのリーダーとともに

＜グリーンエネルギーの先駆け ソーラーセンチュリーを起業＞

グリーンピースとオックスフォード大学で気候変動に関する具体的な活動の経験を積んだ後、1997年、レゲット博士は太陽光発電を手掛ける会社、ソーラーセンチュリーを創設します。

太陽光エネルギーと気候変動を懸念する金融投資家を結びつけるための非営利団体という構想の元に設立し、後に営利企業として発電装置の販売等を始めます。創設から6年ほどかかりようやく採算がとれる会社になりました。しかし、それまでには多くの困難に見舞われたと博士は言います。最大の難関だったのは、石油会社や石炭会社などのエネルギー業界の既得権益層と激しい戦いを強いられたことでした。議論のたびに、彼らはいつも、“太陽光エネルギーがこの先最も安価なエネルギー形態となり、化石燃料に匹敵するようになったとしたら、我々も方



写真 3 英国政府が太陽光産業への支援を削減した後、キャンペーン活動に取り組むソーラーセンチュリーのスタッフたち

向性を変えるだろう”と言って来たそうです。しかし、実際に太陽光発電が普及するようになって、彼らはそうはしませんでした。依然として環境に大きなダメージをもたらし、より費用のかかる方法で現状を維持しようとしています。

その戦いは今も続いている状況です。もうひとつの壁は資金集めに関することでした。ソーラーセンチュリー創設時は太陽光発電の黎明期です。太陽光発電に投資をしてもらえるよう金融機関を説得するのが非常に困難で、仮にベンチャー投資家たちが投資してくれたとしても、短期利益を求められ、しばらくの期間はそれにも悩まされ続けたと博士は当時を振り返っています。創設時の困難を乗り越え、ソーラーセンチュリーが成功した理由を博士は2つあげています。ひとつは博士が雇った人材が、困難にも果敢に対応してくれる非常に献身的で優秀な人たちだったことです。設立して暫くの後、会社が採算をとれるようになったところで、大きな会社で働いていた経験があり、リーダーとマネージャーの両方の資質を持つ人材にCEOを委ねることができたことも幸運だったそうです。そしてもうひとつは、2007年から2008年にかけて起こったリーマンショックを乗り越えられるだけの資本を確保していたことだと言います。多くの優良企業が倒産する中、これも極めて幸運だったと博士は語っています。こうして多くの困難を乗り越えソーラーセンチュリーはイギリス最大の太陽光エネルギー関連会社にまで成長することができたのです。



写真 4 ソーラーセンチュリーらしいマーケティング制作の一例

ー 国際色豊かな企業文化を祝して

レゲット博士は、当時から今においても、グリーンエネルギーが気候変動による地球環境の危機を打破するカギであると考えています。太陽光発電は非常に便利で優れた技術です。設置するだけで、動かす必要はなく、今後の世界エネルギーの分野で重要な役割を占めることになるかと博士は信じ続け、それは現実になりつつあります。

会社設立当初、口をそろえて“太陽光エネルギーなんて原子力や石炭、ディーゼル、ガスといった他のエネルギー源には絶対にはかない”と言っていたエネルギー評論家たちが、今では太陽光エネルギーの素晴らしさを称賛しているのを見ると、博士は呆れて、嫌みのひとつも言いたくなるような気持ちになるそうです。

ソーラーセンチリーに大きな価値をもたらした活動のひとつにアフリカでのソーラーランタンの販売があります。これは、会社の利益の5%を活用してアフリカの小規模な起業家にソーラーランタンを販売してもらう事業です。これにより現地に持続可能なビジネスを生み出す仕組みを構築したのです。この事業は企業としての社会的意義だけでなく、社員のモチベーション向上や組織文化の強化に貢献し、会社に大きな成果をもたらしました。



写真 5 マラウイの教室で、ソーラー照明を実演する
ソーラーエイドのミッションに参加するレゲット博士

当初はケニアとタンザニアで市場を開拓し、現在はマラウイとザンビアで活動を行っています。レゲット博士は、アフリカを訪問した際、灯油すら購入できず、暗闇の中で暮らしていた人々が、ソーラーランタンにより、夜に自宅を明るく照らして生活している姿を見た時、非常に感慨深く、心を動かされる喜びに満ちた体験をしたそうです。

＜金融界への貢献 カーボン・トラッカー・イニシアチブ（CTI）＞

レゲット博士は2010年に非営利のシンクタンク、カーボン・トラッカー・イニシアチブ（CTI）を設立します。博士はキャリアを通して、化石燃料に含まれる膨大な炭素が大気中に排出し続ければ、気候は完全に崩壊へと向かう、という議論を主張し続けていました。その意見に賛同してくれた若手ファンドマネージャーのマーク・カンパナーレとの出会いをきっかけとして、彼のアイデアの元、彼を初代CEO、博士は会長としてCTIを設立したのです。CTIは、気候変動が金融市場に与える影響についての研究をし、金融界から非常に高い評価を受け一連の報告書を発表し続けています。カーボンバブルの存在や座礁資産となる化石燃料を新たな投資対象とせずに、そのまま残す必要性について広く認識を促す上で、金融界に一定の影響を発揮してきました。カーボンバブルとは、化石燃料資産の価値が実際よりも過大評価されていることを示す概念です。地球環境を守るための気候変動対策として、この先化石燃料の使用制限

が必須課題となった場合、エネルギー産業が保有する化石燃料は、使うことのできない座礁資産となり、その資産は何の価値も持たなくなります。しかし、現状は依然として多くの金融機関が化石燃料関連への投資を継続しており、化石燃料事業を展開する企業も、その開発や拡大に注力し続けています。現在、世界が直面している課題は、化石燃料からの脱却をできるだけ持続可能な形で、且つ計画的に進めることです。その対応を先延ばしすればするほど、気候崩壊のリスクは高まって行きます。そしてある時点で急激な形で化石燃料からの撤退が起これば、世界の金融システムに大きな負荷を与えることになり、深刻な金融危機を招く可能性があるのです。そのためにも、カーボンバブルがはじける前に、化石燃料からの段階的な撤退が必要であると、CTI をはじめとする多くの専門家が警鐘を鳴らしています。

金融界から高い評価を受ける CTI において、レゲット博士は初代会長として、CTI の個性豊かなプロのアナリスト集団を束ね、チームとしての一体感を保つ役割を果たして来ました。CTI は、これまでに自分が関与した中で最も成功した非政府組織であるとレゲット博士は語っています。

<新たな活動 ハイランド・リワイルディング>

現在、レゲット博士が新たに力を入れている活動が、自然生態系の再生プロジェクトです。そのために博士はゼロから新しい会社をスタートさせました。それがハイランド・リワイルディングです。2020 年、レゲット博士が創設したソーラーセンチリーは、ノルウェー政府が所有する再生可能エネルギー企業に買収・統合されました。それによりある程度まとまったお金を手にした博士は、かねてより考えていた新たなプロジェクトを立ち上げることに挑戦したのです。博士は、クリーンエネルギーだけでなく、炭素を自然環境に戻す取り組みが必要だと考えていました。

そこで目指したのが“自然の再生”です。気候変動による危機と生物多様性の崩壊という二つの問題を、ひとつのプロジェクトで同時に解決できないかと考えたのです。自然再生の活動は収益性のある事業として取り組んでいます。炭素クレジットと生物多様性クレジットの両方を適正な価格で正しく評価し、その効果を持続させ、生物多様性の回復を信頼できる形で可視化することが重要だと博士は言います。

もうひとつ、自然再生を実現するために必要不可欠なのが地域のコミュニティです。現在ハイランド・リワイルディングが活動しているスコットランド西海岸の地域のひとつ、タイヴァリックでは、現地の人々で構成されたチームと運営委員会があり、博士たちのチームと共同で意思決定を下し活動に取り組んでいます。その具体的な取り組み活動のひとつが、温帯雨林の再生と拡大です。かつてスコットランド西部のあち

ここにみられた温帯雨林は、今ではわずかに残されているだけです。その温帯雨林を再生することで、炭素の吸収を回復させ、生物多様性を向上させていくのです。

ハイランド・リワイルディングにおける目標は、かつてソーラーセンチリーで実現したように、小規模なところから始め、急速な成長を遂げ、自然再生という新しい市場を拡大させることで、人々が持続的に暮らせる未来を実現していくことだと博士は言っています。ハイランド・リワイルディングは、ようやく収益を生み出すところまで来ているそうです。立ち上げたばかりのこの産業を信頼性のあるビジネスへと成長させ、人々が安心して投資できる環境を整えるという目的に向かって、着実に実績を重ねています。レゲット博士は、この新しいプロジェクトは、素晴らしい取り組みで、非常にやりがいがあり、本当に楽しみながら夢を抱いて活動していると話しています。



写真 6 ネス湖を望むスコットランド・ハイランド地方、インヴァネスシャーのバンロイトにある、ハイランド・リワイルディングが管理する土地



写真 7 スコットランド西部、タイヴァリック半島にある、ハイランド・リワイルディングが管理する土地

＜環境と経済＞

環境と経済のバランスについて議論する際には、経済の健全性を測る従来の基準を見直す必要があると博士は言います。従来の経済成長が意味するところには、地球を破壊するような要素も含められているため、それを含めた形で健全性を測り続けるのは不適当だからです。一般的に、経済成長について考えるとき、経済は無限に成長するという前提のもとで、経済分析をしてしまいがちです。しかし気候変動という観点から見るとこれは正しくありません。気候科学者たちの予測が正しければ、さほど遠くない未来に、気候崩壊による物理的な影響で、これまでに積み上げられてきた富が、蓄積を超えるスピードで崩壊し始め、その結果、分析上の経済成長予測は撤回されることになるわけです。



写真 8 ソーラーセンチュリー時代、チームミーティングを進行するレゲット博士

気候変動に関するそういった前提を受け入れた上で社会が目指すべき事は、気候変動に対抗する手段を育むこと。例えば、再生可能エネルギーの利用や、温室効果ガス排出の削減など、異なる方法で繁栄を築くためのあらゆる仕組みです。実際にとても多くの人々が、それは実現可能だと信じています。そのやり方では現在のような GDP 成長はないかもしれませんが、地球上における真の繁栄を生み出すための方法は、確実に成長していくだろうと博士は語っています。

＜仕事への取り組み姿勢＞

科学者としてのキャリアと、起業家・ビジネスマンとしてのキャリアの2つの側面を持つレゲット博士には、これまでの経験と体験を通じて、それぞれにおける仕事への取り組み姿勢があります。科学者としての博士の信条はゼネラリストであることを恐れないことだと言います。地球の歴史を学ぶ際には、地質学に関連するあらゆる専門分野—古生物学、化石学、地球物理学、地殻の構造、地球の地殻など—あらゆる分野の理解が必要です。そのように様々な分野の知識を取り入れることで、いわゆる何でも屋、専門のない雑学者であるように見られる危険性がありますが、それを恐れてはならない、自分がゼネラリストである事を恥じる必要は全くない、というのが博士の考え方です。これは、オックスフォード大学での指導教官に教わったことで、博士はこの考え方を今でも大切にしています。

一方、起業家として博士の信条は、失敗を恐れないことだと言います。起業し事業を継続させていけば、当然のごとく数多くの困難に見舞われます。成功も失敗も経験してきた中で、博士がいつも自分に言い聞かせてきたことは、“とにかく誠実さと正直さを持って、自分にできる限りのベストを尽くすしかない”ということ、そしてその上で、“起こるべきことは起こる”と受け止めるようにすることだそうです。幸いなことに、これまで起こった出来事の多くは非常に良い結果につながり、失敗よりも成功のほうがはるかに多かったと、博士は実感しているそうです。変化を恐れては学者にも起業家にもなれないと語るレゲット博士は、自分のことを、“慎重な楽観主義者”と分析しています。世の中に希望を生み出す仕事をしていることから、その点においては楽観的であるものの、非現実的なわけではなく、行動の結果が決して保証されているものではないことも十分に理解しているところが慎重な楽観主義者ということのようです。また、博士は少しストイックなところがあり、いいことではないと解っているそうですが、昔から今に至るまでワーカホリックで、働いてばかりだとも言っています。

<家族のこと、趣味のこと>

自らをワーカホリックと言っている博士は、趣味をしている暇がないそうですが、時間ができた時にはスコットランドの田舎道をウォーキングして楽しんでいるそうです。現在は、日本人の奥様アキさんとネス湖が見えるスコットランドのインヴァネス郊外で2人暮らしをしています。現在奥様は地元インヴァネスのオーケストラで首席フルート奏者として活動されていますが、以前は国連環境計画（UNEP）に勤めていました。そうした経歴があることから、環境について、また博士が関わる事業についても夫婦で活発に意見交換をするそうです。博士は、議論をする中での奥様の視点やアドバイスをとても参考にしているそうです。奥様が見るレゲット博士は、とても優しく地に足の着いた人で、楽観的なところもある人だと言います。困難な状況に直面しても、何かしらの解決策を見つけ出し、非常に前向きな姿勢で前進していくところは素晴らしく、博士のおかげでとてもエキサイティングな人生を共に体験できていることに感謝しているそうです。そんな素晴らしい博士ですが、うっかりした失敗もよくするようで、空港のラウンジで仕事に集中するあまり、フライトに乗り遅れたことが何度もあるのだそうです。しかしそれも、何かを達成するために集中することができる博士の重要な要素なのだと奥様は評しています。



写真 9 レゲット博士、妻アキさん、ホイペット犬のショー

<メッセージ>

最後にレゲット博士に、各国政府に対して、企業に対して、個人に対して、それぞれにメッセージを頂きました。

◆各国政府に対して

まず各国政府に対しては、“約束したことを実行してください”というメッセージを伝えたいです。非常に野心的な目標を掲げた気候変動に関するパリ協定には、地球上の大半の政府が署名しました。また同様に野心的な目標を掲げた昆明・モントリオール生物多様性枠組みにも、多くの政府が署名しました。各国政府は今、それを自国に持ち帰り、それらの目標を達成するための政策を実行することが求められています。現状では、各国政府は約束が実践的な行動に結びついておらず、この状況は変えなければなりません。

◆企業に対して

次に企業に対しては、非常にシンプルですが、“短期的思考から脱却する方法を見つけてください”です。もし、科学者たちが警告している存続の危機という状態が実際にそれほど深刻なものであるなら、その脅威を解体し打ち破ることに積極的に関与しなければ、未来にはビジネスを続けることすらできなくなるでしょう。つまり、行動を起こすことはビジネス上の利益にかなうのです。それが私からのメッセージです。非常に明確なメッセージではないでしょうか。このように共感を呼ぶ概念ではあるのですが、ビジネス界にはそれを理解し、行動に移そうとしている人はまだ多くはいません。

◆個人に対して

最後に私たち皆に対してですね。私たち一人ひとりができることは、“人生のどんな場所、どんな段階にいたとしても、自分が影響を与えられる範囲で何かしらの行動を起こす事はできる”、ということです。私自身はありがたいことに、ある程度実質的な取り組みを実行できる立場にあります。

でも、もしあなたがそれをできないとしても、例えば仕事や家族のためにあまり時間がないなら、たとえ小さな事でも、できることをすればいいのです。皆がそうすれば、社会全体や個々の行動に変化の連鎖を生み出し、人類が生き残れる未来に向かうために必要な変化を実現できると信じています。